

協働型サービスラーニングにより 「社会人基礎力」養成をめざす教科における「選択パターン」の導入

川田 博美

Introduction of the "selection pattern" in the subject which aims at "basic-ability-to-work-in-society" cultivation by collaborated type service learning

Hiroimi KAWADA

目的

1. 背景

著者が所属する名古屋女子大学短期大学部生活学科生活情報専攻(以下、本専攻という)では、短期大学としての実践的な職業教育の提供に加え、学生(定員1学年80名)の学習意欲を向上させ、さらに、多様な価値観を持つ人々との協力や協働ができる人材の育成のために、コミュニケーション力を高めることができるような特色ある教育システムを構築する試みを、2001年からいろいろと実施してきた^{(1)~(29)}。その一つとして2005年4月より、週に1回「ハートライブ・セッション」という、1、2年共通の時間帯を、時間割の一部として組み込んで、いわゆる「バーチャル・カンパニー」の活動や、コミュニケーション力育成のためのセミナーなどの実施に利用してきた。

2007年4月からは、教科『バーチャル・カンパニー演習』(入門・基礎・実践・応用)をカリキュラムに設置し、1年から2年までの4セメスタを利用して「ハートライブ・プログラム」の1つとして、カリキュラムの中で提供できる環境を整えた。この教科は、現在、1、2年生相互や社会人との協働を通して1つのイベントを企画・運営させようとする内容となっており、目標となるイベントを毎年2月に開催する「春待ち小町(はるまちこまち)」と位置づけ、その実現に向けての授業展開をしている⁽²⁾。

独自のイベントの開催を目標として授業展開するようになってから2年が経過し、3年目となる2009年度からは、この教科の意義をさらに高めるために「協働型サービスラーニング」を目指している。2011年度の入学生に対しては、「協働型サービスラーニング」の強化を図るために、地域貢献ボランティア団体と連携して、セミナーによる「ボランティア」と「社会人基礎力」の育成プログラムと「学外でのボランティア実践」プログラムとしての地域貢献ボランティア活動への課外活動との仲介を実験した。この取り組みに参加する学生は、いわゆる「サービスラーニング」の核心の1つともいえる学生本人の自発的な参加が期待できるものである。そこで、これらのプログラムを利用した学生と利用しない学生が同じ教科『バーチャル・カンパニー演習』を経て、どのように成果の違いが出てくるのかも見極める必要がある。より特色のある教育システムの構築に結び付けるために、この取り組みについては引き続き継続して実験中である⁽³⁰⁾。

2. 問題意識

教科『バーチャル・カンパニー演習』は、「協働型サービ斯拉ーニング」を通して、「社会人基礎力」を育てる機会として提供している。

「サービ斯拉ーニング」を支える重大な構成要素は、(1) プロジェクトの選択・構想・実行・評価に学生の意見を最大限に活かすこと。(2) 当事者・実行・結果の多様性を尊重すること。

(3) 地域とのコミュニケーションやふれあい、パートナーシップや協力を奨励すること。(4) 学生に自分の役割、技術、必要な情報、注意事項、共に働く人への思いやりを理解させること。

(5) 学生の反応や気づきを目標達成の中心におき、プロジェクトの前、最中、後に「critical thinking (批評的思考)」を用いて考えること。(6) 学生の考えを認め、ほめ、深めることである。

教科『バーチャル・カンパニー演習』を「協働型サービ斯拉ーニング」の場としていく目的と期待されるその効果としては、(1) 短大の1、2年生を対象に実施することで、学生一人ひとりが自らにとって将来必要な学習の意味を確認し、地域や社会問題への関心を広げ、グループでの協同学習で基礎的な力をつける。(2) 実践的な情報技術教育への導入教育としてモチベーションを高めるとともに、IT環境への理解を深め、より実践力の高い専門職養成を図る。

(3) 大学と地域団体との連携によるコミュニケーション教育プラットフォームを構築することで、効果的な協働型サービ斯拉ーニングのプログラム開発および評価体制を構築する、ことなどがある。これらの実現のために、あえて、地域団体や関連団体との連携の強化を図り、この教科の授業展開が、単に「学生間のコミュニケーション力強化」だけに終わることなく、実働する社会との関わりを持

たせつつ「社会とのコミュニケーション力強化」プログラムとなるように授業展開の実験を重ねていく必要がある⁽³¹⁾。

さらに、「社会人基礎力」とは、経済産業省が提唱する「職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力」をあらわす概念である。「社会人基礎力」には、3つの能力と12の能力要素があり、3つの基礎能力とは、①前に踏み出す力、②考え抜く力、③チームで働く力である。また、12の能力要素は、①主体性、②働きかけ力、③実行力、④課題発見力、⑤計画力、⑥創造力、⑦発信力、⑧傾聴力、⑨柔軟性、⑩状況把握力、⑪規

表1 社会人基礎力としての3つの能力と12の能力要素⁽³²⁾

分類	能力要素	内容
前に踏み出す力(アクション)	主体性	物事に進んで取り組む力 例)指示を待つのではなく、自らやるべきことを見つけて積極的に取り組む。
	働きかけ力	他人に働きかけ巻き込む力 例)[やろうじゃないか]と呼びかけ目的に向かって周囲の人を動かしていく。
	実行力	目的を設定し確実に行動する力 例)言われたことをやるだけでなく自ら目標を設定し、失敗を恐れず行動に移し、粘り強く取り組む。
考え抜く力(シンキング)	課題発見力	現状を分析し目的や課題を明らかにする力 例)目標に向かって、自ら「ここに問題があり、解決が必要だ」と提案する。
	計画力	課題の解決に向けたプロセスを明らかにし準備する力 例)課題の解決に向けた複数のプロセスを明確にし、「その中で最善のものは何か」を検討し、それに向けた準備をする。
	創造力	新しい価値を生み出す力 例)既存の発想にとらわれず、課題に対して新しい解決方法を考える。
チームで働く力(チームワーク)	発信力	自分の意見をわかりやすく伝える力 例)自分の意見を分かりやすく整理した上で、相手に理解してもらおうように的確に伝える。
	傾聴力	相手の意見を丁寧に聴く力 例)相手の話しやすい環境をつくり、適切なタイミングで質問するなど相手の意見を引き出す。
	柔軟性	意見の違いや立場の違いを理解する力 例)自分のルールややり方に固執するのではなく、相手の意見や立場を尊重し理解する。
	状況把握力	自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力 例)チームで仕事をするとき、自分がどのような役割を果たすべきかを理解する。
	規律性	社会のルールや人との約束を守る力 例)状況に応じて、社会のルールに則って自らの発言や行動を適切に律する。
	ストレスコントロール力	ストレスの発生源に対応する力 例)ストレスを感じるがあっても、成長の機会だとポジティブに捉えて肩の力を抜いて対応する。

律性、⑫ストレスコントロール力である⁽³²⁾(表1)。

「社会人基礎力」の「前に踏み出す力」(アクション) (一歩前に踏み出し、失敗しても粘り強く取り組む力) は、実社会の仕事において、答えは一つに決まっておらず、試行錯誤しながら、失敗を恐れず、自ら、一歩前に踏み出す行動が求められ、失敗しても、他者と協力しながら、粘り強く取り組むことが求められる、ということから、次の3つの能力要素が設定された。

「主体性」は、物事に進んで取り組む力で、指示を待つのではなく、自らやるべきことを見つけ積極的に取り込む能力である。「働きかけ力」は、他人に働きかけ巻き込む力で、「やろうじゃないか」と呼びかけ目的に向かって周囲の人を動かしていく能力である。「実行力」は、目的を設定し確実に行動する力で、言われたことをやるだけでなく自ら目標を設定し、失敗を恐れず行動に移し、粘り強く取り組む能力である。

次に、「考え抜く力」(シンキング) (疑問を持ち、考え抜く力) は、物事を改善していくためには、常に問題意識を持ち課題を発見することが求められ、その上で、その課題を解決するための方法やプロセスについて十分に納得いくまで考え抜くことが必要である、ということから、次の3つの能力要素が設定された。「課題発見力」は、現状を分析し目的や課題を明らかにする力で、目標に向かって、自ら「ここに問題があり、解決が必要だ」と提案する能力である。

「計画力」は、課題の解決に向けたプロセスを明らかにし準備する力で、課題の解決に向けた複数のプロセスを明確にし、「その中で最善のものは何か」を検討し、それに向けた準備をする能力である。「創造力」は、新しい価値を生み出す力で、既存の発想にとらわれず、課題に対して新しい解決方法を考える能力である。

「チームで働く力」(チームワーク) (多様な人とともに、目標に向けて協力する力) は、職場や地域社会等では、仕事の専門化や細分化が進展しており、個人として、また組織としての付加価値を創り出すためには、多様な人との協働が求められ、自分の意見を的確に伝え、意見や立場の異なるメンバーも尊重した上で、目標に向けてともに協力することが必要である、ということから、次の6つの能力要素が設定された。「発信力」は、自分の意見をわかりやすく伝える力で、自分の意見を整理した上で、相手に理解してもらうように的確に伝える能力である。「傾聴力」は、相手の意見を丁寧に聴く力で、相手の話しやすい環境をつくり、適切なタイミングで質問するなど相手の意見を引き出す能力である。「柔軟性」は、意見の違いや立場の違いを理解する力で、自分のルールややり方に固執するのではなく、相手の意見や立場を尊重し理解する能力である。「状況把握力」は、自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力で、チームで仕事をするとき、自分がどのような役割を果たすべきかを理解する能力である。

「規律性」は、社会のルールや人との約束を守る力で、状況に応じて、社会のルールに則って自らの発言や行動を適切に律する能力である。「ストレスコントロール力」は、ストレスの発生源に対応する力で、ストレスを感じるがあっても、成長の機会だとポジティブに捉えて肩の力を抜いて対応する能力である⁽³²⁾。

教育プログラムの設計にあたっては、教育目標を短大生に対する「社会人基礎力の育成」と明確にすることによって、3つの能力と12の能力要素をその指導上の骨格とすることができる。座学により、これらの能力や能力要素について説明することは容易でも、それを実践する場がなければ、自分の持つ能力を自覚することができない。特にそれらの能力をうまく発揮して、他人を巻き込んだり、自分の意見をはっきり述べたりしながら、自分の能力を発見していく場の提供が必要である。そこで次に必要になるのが、プログラムの提供形態である。学生が「社会人基礎力」を発揮できる場面や環境を提供する必要がある。「発信力」を伸ばすのであれば、

他人に対し自分たちの企画や意見を発信する場がなければならない。「働きかけ力」を伸ばすためには、他人の協力を得るために働きかけなければならない機会が必要である。そうした環境が整った上で、学生のやる気、すなわち主体性を引き出すために、「社会の役に立った」という実感が伴うような課題を提供する必要がある。さらに、その課題を解決するために、日頃学んでいる専門知識やスキルが活用されれば、より実践的な学習環境を実感できるであろう。

「協働型サービスラーニング」と「ハートライブ・プロジェクト」を在学期間の核に据え、いわゆる教科『バーチャル・カンパニー演習』を中心としたカリキュラムの内外で、人と協働して実現していく過程を体験的に学べるような各種プログラムを提供していき、そこでは、「自己形成力」、「コミュニケーション力」、「社会人基礎力」を身に付けさせ、ボランティア精神も身につけさせることを目指している。その育成が効果的に行われるために、「自己発見」と「キャリア支援」および「学習ポートフォリオ」（専攻教員共有の学生の電子個人カルテ）と「学生生活支援サイト」を強化し、連携を図りながら、在学時の各学生の成長とその過程を追跡し、卒業に至る学生の満足度の向上に寄与させるものである。その際、「入学前プログラム」と「初年次教育プログラム」、そして「キャリア教育プログラム」を一貫した流れの中でこの取り組みを行うことにより、より効果的な展開が期待できると考えている⁽³⁰⁾。

方法

こうした取り組みに類似した教育プログラムが他にあるのであろうか。「協働型サービスラーニング」や「社会人基礎力の育成」については、次のような短大での取り組み例がある。特に、「選択パターン」についての状況を探り、本プログラムの先行事例として検討したい。

事例1

大分県立芸術文化短期大学（大分県大分市）では、情報コミュニケーション学科を中心に全学を対象とした「体験をスキルに変えるナラティブ能力育成－サービスラーニングを中心とした自己の物語を探し創り発信する能力の形成プログラム」（以下、ナラティブ能力プログラム）が、大学教育推進プログラムに選定され、2009年度から2011年度の3年間、文部科学省の財政的支援のもとで、取り組みの充実と情報発信を行うこととなった。サービスラーニング、インターンシップ、海外語学研修などの体験的学習に力を入れ、とくに情報コミュニケーション学科では2007年度から、サービスラーニング、インターンシップ、海外語学研修を選択必修として、ほとんどの学生がサービスラーニングを履修している。

サービスラーニングでは、地域活動と教科学習を結びつけ、学んだことを学習の場で活かす、地域での活動をもとに学習の意味を考えることを目的とする。情報コミュニケーション学科は、メディア (M)・情報 (I)・心理学 (P)・社会学 (S) からなる特性 (MIPS) を活かし、地域に学び情報を発信することを学科の方針としてきた。ナラティブ能力プログラムはさらに、体験的学習をただの体験に終わらせない、この経験を自分の物語に変えていく、そしてその物語を語り、発信するスキルを身につけてもらおうとする試みである。今後、活動と並行して、物語をつくり、語り、発信するためのプログラムを展開する。活動を企画運営する、活動の意味を調べ学ぶ、さらなる活動を考える、その体験を発信し、みんなに知ってもらい、この一連のプロセスを通じて、今の日本の若者の弱点とされる自信力（自己肯定感）を高め、社会に一歩

を踏み出すきっかけにしようとするものである。

2008年度前期に実施した活動は、「あしなが学生募金・上野の森の会・アースデイ・キャンドルナイト・竹田食育ツーリズム・鶴崎saemon23・大分七夕まつり・キャンパスカフェ・大分子ども劇場キャンプ」などである。活動内容はサービスラーニング発表会で発表し、ホームページなどで発信し、今後は活動内容・発表機会・情報発信の充実を行う。いまは情報コミュニケーション学科を中心に実施をしているが（他学科も履修可能）、さらに共通教育科目として全学に拡げ、美術科・音楽科や国際文化学科を含めたより広範で特徴的な活動を展開していく予定である。また海外における活動や海外語学研修の強化も行いたいと考えており、たくさんの学生が当然のように地域で活動し、学習に対する意欲を深めるとともに、自信力と情報発信力を身につけ、社会に羽ばたく、また職場と家庭以外の地域という新しいステージを見いだしてもらおうというものである⁽³³⁾。

この取り組みにおけるコア科目は、『地域社会特講』、『サービス・ラーニング』、『インターンシップ』、『海外語学研修』、『ナラティブ能力育成講座』の5科目で、全学生が履修可能な共通教育科目であり、主体となる情報コミュニケーション学科では専門科目である。『地域社会特講』では、地域活動のリーダーを講師に招き、現場報告と活動機会の紹介をしている。『サービス・ラーニング』では、紹介を受けた現場に学生が赴き、ボランティア活動を行う。『インターンシップ』では、職場体験をすることで、進路選択に活かす。『海外語学研修』では、異文化体験を通して、自国文化を相対化する。『ナラティブ能力育成講座』では、社会学のナラティブ・アプローチを土台に、演習形式で自己物語を紡いでいく。その中で、取り組みに対する学生の何らかの選択が発生すると予想されるのは、総論としての『地域社会特講』以外の4科目であるが、大分県立芸術文化短期大学ではそれを「体験活動のメニュー」と称し、たとえば、教科『サービス・ラーニング』においては、前述の「あしなが学生募金」、「上野の森の会」などのようなメニューを提示して、学生はそこから自ら取り組む活動を選択している。そしてそのメニューを提示する目的は、学生にオンザジョブで社会との接点を持たせ、環境、福祉、地域活性化などへの関心を育み、それらを身近に感じさせることである。履修者には、与えられた作業だけではなく、学生自らプロデュースして関与できる領域を広げさせ、他大学のボランティア学生との共同の作法を学び、地域と学生による共創まちづくりを進め、それぞれが独自調査を行ったうえで、発表会を実施して評価している。

事例2

湘北短期大学（神奈川県厚木市）では、「「勇気づけ企業面接会」による仕事への意欲と社会人基礎力の育成」として、2009年度より「社会人基礎力」の育成に取り組んでいる。最近10年にわたり96%以上の就職実績を維持している湘北短期大学では、1年次後期の「キャリアガイダンス」にはじまる多彩な就職支援プログラムを用意している。中でも、「グループワーク」「インターンシップ」「合同企業面接会（学内開催）」など、職業に対する意欲と社会人基礎力（考える力、伝える力、行動する勇気、礼儀正しさ）を養う「体験型プログラム」は特に重視している。そのコアとなる取組、「勇気づけ企業面接会」は、「働くことにはどんな意味があるのか」「自分のセールスポイントはどこにあるのか」などを学生が自ら発見し、自信をもって就職活動に臨んでもらうために行うものである。キャリアカウンセラーとして活躍する企業人が面接を担当し、面接終了後には「勇気づけアドバイス」をもらえるほか、励ましの手紙が学生一人ひとりに届けられる。専門家からの適切なアドバイスを直接受けられるこのプログラムは、就

職活動に向け自分に何が必要かを知る絶好の機会となる。事前から事後までのきめ細やかなサポートにより、着実に実践力を身につけるというプログラムであり、キャリア支援の一環としての取り組みである⁽³⁴⁾。

事例3

華頂短期大学(京都市)では、「学生研修をベースとする社会人へのレディネス育成プログラム」として、学生の「自発性・主体性」に基づいた「参加と学び」をコンセプトとした学生研修で、就職促進につなげることを目標として、教育方針である「生命の尊さを深く理解し、素直に感謝のできる社会人を育成する」に基づいて、学生がよき社会人として巣立っていくことを支援することを目的としたプログラムを展開している。年間を通した学生研修への参加から、主体性をもった生き方を養いながら卒業時までには社会人への準備状態に成長していく構成になっており、学生研修は、「導入研修」で1年次生は入学直後に自ら主体的に学び生きることの大切さを、2年次生は主体的に生きる社会人になる準備として考えることから始まり、その後、学生の個々の興味に基づいた選択型研修へと続いていく。選択型研修の「スキルアップ研修」で「自発的・主体性」に基づいた「参加と学び」の意識を活性化させながら、社会人になることへの意味・意識を学ぶ「ステップアップ研修」へと段階的に研修することにより、卒業時に社会人への準備状態が形成されていることを期待するものである。

学生研修は、次の3種類の内容で実施される。①導入研修：自ら主体的に生きることの大切さを考える。②スキルアップ研修：人間力を育む。③ステップアップ研修：就職活動直前対策。①導入研修では、映画鑑賞を通して人間の多様な生き方を学ぶ。様々な人たちと共生・協同の意義を知るとともに、自らが主体的に生きていくことの大切さ、生命の尊さについて考える機会としている。保育や福祉など命に直接関わる職につく学生はもちろん、民間企業に就職する学生にとっても社会生活の基盤を築くものとして位置づけている。②スキルアップ研修は、学生の主体的な意識を高め学習意欲を向上させることを目指している。マナー講座やパソコンテクニック講座など、実務に直結する講座を提供しており、これからのグローバル社会における職業観を意識するために、アメリカ短期研修も実施している。参加者はホームステイをしながら小学校や幼稚園でのインターン研修を体験し、将来の職業について普段とは異なる角度から考える機会となっている。③ステップアップ研修は、就職の直前対策であり、自己PR作成講座、筆記試験対策講座、面接試験対策講座など、就職試験対策のガイダンスを実施している。また社会で活躍する女性を講師に招いたレディネス講座も準備している。ビジネスマナーなど、就職活動中から働き始めた後まで、いつも必要となる力を身につけることができる。そして年1回の交流合宿を、社会人基礎力として求められている「前に踏み出す力」と「チームで働く力」を養成する目的で実施している。参加した学生は、団体行動を通じて規律性や状況把握力の重要性を実感しつつ、自分から話しかけ他人の話に耳を傾けるなど、具体的なコミュニケーションの効果をグループワークによって確かめる⁽³⁵⁾。

事例4

豊橋創造大学短期大学部(愛知県豊橋市)では、キャリアプランニング科において、入学者受入方針として、学生は「自分はどういう人間なのか(過去)」を自らに問い、それに基づいて「では、これから何をしたいのか(未来)」を考える。本科の教員側も、常に建学の精神・教育目標に立ち戻り、「これからも教えていきたいこと」を確認し、それを骨格にして「これからの

社会の要請」にどう答え、存在意義を見出してくのか、自問しているうえで、社会人基礎力、汎用性のある実務能力に加え、何れかの専門分野の能力を身につけ社会に貢献したい人を受け入れるとし、教育目標を「短期大学の教育理念に則り、社会人として求められる基礎学力、教養やマナーを身につけさせると同時に、健全な勤労観、職業人意識を育成し、時代の要請に沿った専門的教育を施し、社会に貢献できる人材を養成することを目標とする。」とした上で、次のように項目化している。1. 現代社会の多様な課題を解決するのに不可欠な、社会人基礎力を身につけている。2. 勤労観、職業意識、責任感といった、職業人意識を身につけている。3. 社会人として必要なマナーを身につけている。4. 生涯学習の出発点となる教養を身につけている。5. 論理的思考力、課題発見力、課題解決力、などの知的能力を身につけている。6. 自分で選択した専門分野の知識や技能を身につけている。具体的には、社会人基礎力の育成については、文書作成能力、計算・数学的思考力、情報リテラシー、基礎英語など、一般事務能力で必須な汎用的な能力を育成するため、『ビジネス文書Ⅰ／Ⅱ』、『経営概論』、『計算実務』、『情報処理演習Ⅰ／Ⅱ』、『実務英語』を教科として設置している⁽³⁶⁾。

さて、短大で行われる「社会人基礎力」の育成は、大きく分けて2つのパターンで展開されている。1つは、湖北短期大学や華頂短期大学のように、キャリア支援プログラムの一環として、「社会人基礎力育成プログラム」を提供する形態。そしてもう1つは、豊橋創造大学短期大学部のように「社会人基礎力」の育成をスローガンとして、カリキュラム構成や1つまたは複数の特定の教科によって「社会人基礎力」の育成を補完する形態である。そして具体的なプログラムとして提供する1つめの形態よりも、「社会人基礎力の育成」を一つの教育目標として掲げて提供する形態の方が多い。

事例5

清泉女学院短期大学（長野市）では、国際コミュニケーション科において、短大での学びには、基礎学力、コースの専門知識、社会人基礎力の3つが重要だとして、3つそろってこそ、自己を確立した一人前の社会人になることが可能になるとしている。社会人基礎力の清泉バージョン「清泉スピリット5つの力」を提示し、①問題を発見する力 ②考える力 ③工夫する力 ④コミュニケーションする力 ⑤行動する力、これらを身につけるためには、授業以外にも学内外のさまざまな活動を経験することが一番の近道だとした上で、活動を計画し、実践し、振り返りながら、常に前向きに生きる個人の活動記録として「学生ポートフォリオ」にも取り組んでいる⁽³⁷⁾。

事例6

四国大学短期大学部（徳島市）では、ビジネス・コミュニケーション科において、①社会人基礎力（前に踏み出す力、考え抜く力、チームで働く力）、②実務能力（ビジネスマナー、情報活用能力、簿記、会計、経済・経営など）、③各分野の専門知識・技術を習得すると提示して、社会人としての基礎力、実務能力という「ビジネスにおけるコミュニケーション能力」をベースに、各分野での専門性を身につけることで、ビジネス・スペシャリストとして優れた人材を育成するとしている⁽³⁸⁾。

事例7

文化学園大学短期大学部では、2013年度からの新学科・服装学科の目標を「ファッションを

通して社会に貢献する人材を育てること」とし、ファッションを通して社会人基礎力や国際感覚を養い、自分自身が向上し、自己実現を図ることができるよう徹底した実践教育を行う。ファッションビジネスコース、ファッションクリエイティブコース、ファッションプロモーションコースの3コースでそれぞれの専門分野を実践的に学ぶと同時に、コース共通の選択科目やコラボレーション科目においてもファッションにおける幅広い分野を学ぶことができるよう、カリキュラムも再編成し、服装学の専門教育と社会人としてのスキルアップに力を入れる。そして専門のキャリア支援担当、担任・副担任からなる「就職支援」を科目として充実させ、社会が求める人材を育成する。これからの社会のニーズに応えるファッションや生活文化を学び、ファッション業界で活躍できる人材育成を主とした他にはない「ファッションのONLY ONE短大」をめざすとしている⁽³⁹⁾。

ところで、本専攻は、2013年度より、生活学科の1コースとなり、新たに生活学科生活情報コースとなる。他にはこれまで専攻であった、生活創造デザインコースと食生活コースがあり、これらの3コースで構成され、定員は140名となる。定員80名の本専攻のみで展開してきた教科『バーチャル・カンパニー演習』は、定員140名による必修科目『地域貢献演習』（4セメスタで開講）に引き継がれる予定となった。このことにより、これまで、本教科は、選択科目ということもあり、2学年で100～150名の履修者により運営してきたが、最大280名を収容して運用する可能性が出てきた。現在1つのイベントの企画と運営を目標にして履修者を各役割に分散させて授業展開しているが、これまで5回実施してきた実績から100名程度が指導上の限界であるとし、そこに収容しきれなくなった180名を受け入れる他の企画内容が必要となる。新コースに継続されるこの教科の目的は、「社会人基礎力」の育成である。それを踏まえて、2013年度からの、新たな運用方法を検討する必要が出てきた。そこで、2012年度の履修者、1、2年合わせて125名に対し、「社会人基礎力」をもとにした3つの選択パターンを設定し、運用実験を展開することにした⁽³¹⁾。

これまででは、毎年2月に地域の子供たちを対象として実施するイベントの「春待ち小町」のみをイベント企画と運営の目標として履修者全員で取り組み、「社会人基礎力」の3つの能力と12の能力要素を育むこととしてきたが、2012年度より新たに2つのプロジェクトを設定し、3つのプロジェクトを「社会人基礎力」の3つの能力とそれに伴う能力要素に結び付けることにした。学生に選択を促した3つのプロジェクトは次のとおりである。

①前に踏み出す力（アクション）を育むことを目標とする「セルフ・セレクト・プロジェクト」（地域貢献活動参加型サービスラーニング）、②考え抜く力（シンキング）を育むことを目標とする「オリジナル・プランニング・プロジェクト」（教員協働型サービスラーニング）、③チームで働く力（チームワーク）を育むことを目標とする「春待ち小町プロジェクト」（地域団体協働型サービスラーニング）

前に踏み出す力（アクション）を育むことを目標とする「セルフ・セレクト・プロジェクト」（地域貢献活動参加型サービスラーニング）では、自分で選択した学外での地域貢献ボランティア活動（フィールドワーク）に参加し、実際に社会参加して、実践を通じた学外での学びと授業などの学内での学びを融合させる。前・後期各40時間の活動時間とその活動内容について、参加先の団体より活動証明を受け、実績として認定する。この活動を通じて、主体性、働きかけ力、実行力といった、「前に踏み出す力」を身に付けさせさせ、評価は、活動証明とレポート等で行う。

考え抜く力（シンキング）を育むことを目標とする「オリジナル・プランニング・プロジェ

クト) (教員協働型サービスマーケティング) では、学生と教員により独自に地域貢献活動を企画・運営する。学内外を学びの場とし、前・後期各40時間の活動時間を利用して、地域貢献ボランティア活動を展開する。この活動を通じて、課題発見力、計画力、創造力といった、「考え抜く力」を身に付けさせ、評価は、各担当教員が行う。

チームで働く力 (チームワーク) を育むことを目標とする「春待ち小町プロジェクト」 (地域団体協働型サービスマーケティング) では、地域貢献ボランティア育成団体と協働してイベントを企画・運営する。前・後期各40時間の活動時間を利用して、11月の「ミニ春待ち小町」と1月の「春待ち小町」を本学会場等で開催する。この活動を通じて、発信力、傾聴力、柔軟性、状況把握力、規律性、ストレスコントロール力といった、「チームで働く力」を身に付けさせ評価は、協働する地域団体が行う。

この3つのプロジェクトの内容と前述の他大学の事例について選択方法を比べると、事例1の内容については、自分が体験したい活動そのものであり、あらかじめ用意されたメニューの中から選択するという点で「春待ち小町プロジェクト」と近いが、選択肢が多いことと、それぞれ学外で実施されるイベントを対象としていることが大きく異なる。その意味では、「オリジナル・プランニング・プロジェクト」と同じであり、本学で言う「オリジナル・プランニング・プロジェクト」のみを提供していることになる。このパターンとしては、他に上智短期大学 (神奈川県秦野市) のサービスマーケティング活動や新見公立短期大学 (岡山県新見市) の地域貢献活動⁽³⁰⁾ などがある。

キャリア支援の一環としての取り組みとしての事例2では、「社会人基礎力」の育成には取り組むものの、授業の一環としてではなく、ここでいう「選択パターン」にあたるものはない。同様の目的で「学生研修をベースとする社会人へのレディネス育成プログラム」を展開する事例3は、一定期間で行う研修合宿を利用するもので、本学でいう「越原研修」に相当し、ここでも、プログラムの選択の余地はない。「社会人基礎力」の育成をスローガンとして、カリキュラム構成や1つまたは複数の特定の教科によって「社会人基礎力」の育成を補完する形態である事例4~7でも同様である。

「社会人基礎力」の育成にあたり、それを2年間を通した授業の中で展開するケースがなかなか見つからない中で、さらに、今回施行するような、「社会人基礎力」の3つの能力とそれに伴う能力要素に結び付けるプログラムの中からの選択をさせる試みは、2年間で完結させる短大では運用がむづかしいのかもしれない。

結果と考察

この授業では、対象学生は、「春待ち小町プロジェクト」、「セルフ・セレクト・プロジェクト」、「オリジナル・プランニング・プロジェクト」の3つの中のいずれかの「プロジェクト」に所属して、所属した「プロジェクト」の活動内容に参加する。自分の実力を発揮する機会としてはもちろん、人と協力して目標に向かって作業することにより、コミュニケーション能力や協調性を育てる。原則として、入門から応用まで2年間通して履修することとし、「プロジェクト」の選択は、ガイダンスの後、選択希望を提出し、選考等により決定する。さて、この選択肢により2012年度の活動内容を選択させたところ、「セルフ・セレクト・プロジェクト」は0名 (0%) となり、履修者のほとんどが「オリジナル・プランニング・プロジェクト」 (50

名・40%)か「春待ち小町プロジェクト」(75名・60%)のいずれかを選択することになった。理想としては、2年後の想定280名を「セルフ・セレクト・プロジェクト」は28名(10%)、「オリジナル・プランニング・プロジェクト」(140名・50%)、「春待ち小町プロジェクト」(112名・40%)で運用したいところである。

2012年度は、イベント「春待ち小町」については、125名から75名へとスタッフ人数を50名減少しての展開となっている。前年より約4割スタッフ人数を減らした状態でどのように実施するかという課題も残される。逆に、50名を抱える「オリジナル・プランニング・プロジェクト」では、①地域の皆さんを対象とするパソコンセミナー、②地域の皆さん向けの球技大会、③地域の清掃活動という3つのテーマが策定されたものの、学生による新たな地域貢献活動の企画と、思いのほか希望が多かったその人数でどのように運用体制や指導体制を確立するかが課題となっている⁽³¹⁾。

「セルフ・セレクト・プロジェクト」については、選択時に既に地域貢献のためのボランティア活動に参加している学生が無かったことと、自分で見つけ出すという高い意識もないことから、このプロジェクトの希望者を10%にするための準備(協力団体の確保など)が早急に必要となっている。「オリジナル・プランニング・プロジェクト」については、希望者が意外に多かったことから、担当教員(20名を1組とすると7名以上は必要)の確保とテーマの充実が課題となる。「春待ち小町プロジェクト」は、適正人員より約40名少ない状態での今年度の実施方法の検討と、「社会人基礎力」を育成するための、よりわかりやすい地域団体との協働体制の構築が課題である。そして、さしあたり、来年度の200名体制をどうするかについては、「入学前プログラム」との連携も探りながら、検討を進めなければならない。

要約

情報系短大生を対象とした「協働型サービラーニング」の手法の導入による「社会人基礎力」育成のためのプログラムの展開実験を進めている。「協働型サービラーニング」の多くが、「学内での学び」を基にして、学生の「自発性」と「ボランティア精神」による「学外での学び」を保証する取り組みであるが、本専攻のプログラムの特徴は、学外での活動における協働型サービラーニングの実践ではなく、それを学内で実施するイベントにより実践している点である。履修者全員に、年度ごとに実践の場を継続して提供できる点に意義があり、ノウハウなどを学内に蓄積することができる。これをこれまで選択履修による1専攻単位で実施してきたが、次年度より、学科単位で必修履修とすることになったことを受けて、このプログラムにこれまでの倍以上の学生を収容する必要が出てきた。そのため、1つのイベントでは収容しきれず、複数のテーマに分散させることを目的として、「社会人基礎力」の項目による「選択パターン」を設定し、運用実験を開始した。

参考文献

- 1) 川田博美、箕浦恵美子、佐藤優(2010):「イベント実施により協働型サービラーニングを目指す教科の展開」、教育システム情報学会第35回全国大会講演論文集

- 2) 川田博美、佐藤優 (2010): “協働型サービスラーニングを目指す「バーチャル・カンパニー演習」の試み”、名古屋女子大学紀要 (人文・社会編) 第56号、pp.137-149
- 3) 川田博美 (2009): “ブログを活用した授業内容配信システムの活用と課題”、教育システム情報学会第34回全国大会講演論文集
- 4) 川田博美 (2008): “『春待ち・小町』 咲き誇れ「こころ花」、届け「私ごころ」『開かれた地域貢献事業』～「学生の感性とコミュニケーション力を育む『音と光のフェスティバル』プロジェクト」～”、総合科学研究第1号、名古屋女子大学総合科学研究所
- 5) 川田博美 (2008): “ブログを活用した授業内容配信システムの試み”、教育システム情報学会第33回全国大会講演論文集
- 6) 川田博美 (2007): “国家試験が一部免除になる『あいちIT人材育成特区』に対応したカリキュラムへの取り組み”、日本教育情報学会第23回年会論文集
- 7) 川田博美、森屋裕治、鷺野友美 (2007): “『あいちIT人材育成特区』認定に対応したカリキュラム構築の試み”、名古屋女子大学紀要 (人文・社会編) 第53号
- 8) 川田博美 (2007): “ITを仲立ちとした人と人とのコミュニケーション教育へのブログ活用のための基礎実験”、名古屋女子大学紀要 (人文・社会編) 第53号
- 9) 川田博美 (2007): “ブログを活用した学習環境と学生とのコミュニケーション環境実現への試み”、教育システム情報学会第32回全国大会講演論文集
- 10) 川田博美 (2006): “ITを仲立ちとした人と人とのコミュニケーション教育へのブログ活用の試み”、日本教育情報学会第22回年会論文集
- 11) 川田博美 (2006): “ブログを活用した生活支援の試み”、教育システム情報学会第31回全国大会講演論文集
- 12) 川田博美、武岡さおり、森屋裕治、鷺野友美 (2006): “『あいちIT人材育成特区』に対応したカリキュラムについて”、平成18年度情報処理教育研究集会講演論文集
- 13) 川田博美、武岡さおり、森屋裕治、鷺野友美、小山幸治、田口継治 (2005): “情報系短大における『習熟度別クラス編成』による情報教育の取り組み”、平成17年度情報処理教育研究集会講演論文集
- 14) 川田博美 (2005): “短期大学におけるITを仲立ちとした人と人とのコミュニケーション教育の試み”、日本教育情報学会第21回年会論文集
- 15) 川田博美、武岡さおり、鷺野友美、小山幸治 (2005): “短期大学における学生の運営によるバーチャル・カンパニーの試み”、教育システム情報学会30周年記念全国大会論文集
- 16) 川田博美、森屋裕治、西尾尚子、小山幸治、田口継治 (2005): “習熟度別クラス編成による効果的な情報教育への取り組み－事前アンケートに見る学生の推移－”、名古屋女子大学紀要 (人文・社会編) 第51号、pp.35-45
- 17) 川田博美 (2004): “地域との連携による『パソコンインストラクター実習』の試み”、『電子情報通信学会信学技報ET2004-6』、pp.47-52
- 18) 森屋裕治、川田博美 (2004): “情報系短大のカリキュラムに関する戦略策定の試み”、日本教育情報学会第20回年会論文集
- 19) 川田博美、武岡さおり、森屋裕治 (2004): “そのすべてを学生の手により実施する教科『パソコン・インストラクター実習』の試み”、日本教育情報学会第20回年会論文集、pp.268-271
- 20) 川田博美、武岡さおり、田口継治、杉村藍、尾崎正弘 (2003): “能力別クラス編成による効果的な情報教育の実施について”、『教育情報研究』第19巻第2号、pp.17-26
- 21) 田口継治、川田博美、武岡さおり、杉村藍、西尾尚子、滝下治里、加藤恵子、尾崎正弘 (2003): “能力別クラス編成とインターネットを利用した教育指導方法の実験について”、名古屋女子大学紀要 人文・社会編第49号
- 22) 尾崎正弘、武岡さおり、川田博美、小山幸治、足達義則 (2002): “個別学習によるハイパーテキスト「シスアドブック」の開発”、教育システム情報学会第27回全国大会講演論文集、pp.305-306
- 23) 川田博美、武岡さおり、滝下治里、田口継治、尾崎正弘 (2002): “能力別クラス編成による効果的な情報教育カリキュラム実現の試みについて”、日本教育情報学会第18回年会論文集、pp.246-249
- 24) 小山幸治、武岡さおり、川田博美、尾崎正弘、足達義則 (2002): “理解度向上支援総合ネットワーク型教育システムの構築－データ構造に着目したDBの構築－”、日本教育情報学会第18回年会論文集、pp.254-257
- 25) 田口継治、川田博美、武岡さおり、尾崎正弘 (2002): “インターネットを利用した教育指導方法の実験について”、教育システム情報学会第27回全国大会講演論文集、pp.335-336
- 26) 川田博美、尾崎正弘、江島徹郎、足達義則 (2002): “CAI教育に適応したクライアント・サーバシステム

- の開発”、名古屋女子大学紀要 家政・自然編第48号、pp.113-120
- 27) 小山幸治、武岡さおり、川田博美、尾崎正弘、足達義則 (2002)：“理解度向上支援総合ネットワーク型教育システムの構築—データ構造に着目したDBの構築—”、日本教育情報学会第18回年会論文集、pp.254-257
 - 28) 武岡さおり、尾崎正弘、川田博美、岩下紀久雄、江島徹郎、足達義則 (2002)：“学習者の理解度を考慮したハイパーテキスト型CAI教材の試作”、名古屋女子大学紀要 家政・自然編第48号、pp.177-186
 - 29) 武岡さおり、尾崎正弘、川田博美、岩下紀久雄、江島徹郎、足達義則 (2001)：“学習者の理解度を考慮したハイパーテキスト型CAI教材の開発”、日本教育情報学会第17回年会、pp.232-235
 - 30) 川田博美 (2012)：“「協働型サービスラーニング」をめざす教科の「社会人基礎力」を育成する教育プログラムとしての可能性”、名古屋女子大学紀要 (人文・社会編) 第58号、pp.211-224
 - 31) 川田博美 (2012)：“協働型サービスラーニングをめざす教科における選択パターンの導入”、教育システム情報学会第37回全国大会講演論文集、pp.406-407
 - 32) 経済産業省 (2008)：『今日から始める社会人基礎力の育成と評価』、2008年7月30日、経済産業省。
 - 33) <http://www.oita-pjc.ac.jp/edu/narrative/index.html> (大分県立芸術文化短期大学)
 - 34) <http://www.shohoku.ac.jp/aboutus/program04.html> (湘北短期大学)
 - 35) <http://www.kacho-college.ac.jp/report/index.html> (華頂短期大学)
 - 36) <http://www.sojo.ac.jp/outline/policy/career-planning.php> (豊橋創造大学短期大学部)
 - 37) <http://www.seisen-jc.jp/jc/subject/communication/greeting.php> (清泉女学院短期大学)
 - 38) <http://www.shikoku-u.ac.jp/academics/junior/bc/> (四国大学短期大学部)
 - 39) <http://bwu.bunka.ac.jp/study/tan/index.php> (文化学園大学短期大学部)
 - 40) 川田博美、稲吉由味子、千葉みどり (2012)：“「社会人基礎力」の育成を目的として地域貢献ボランティア団体と協働で取り組む教育プログラムの試み”、教育システム情報学会第37回全国大会講演論文集、pp.408-409
 - 41) 川田博美、箕浦恵美子 (2011)：“協働型サービスラーニングの実現に向けての教育システム構築の可能性”、名古屋女子大学紀要 (人文・社会編) 第57号、pp.237-250
 - 42) 川田博美、箕浦恵美子、佐藤優 (2011)：“協働型サービスラーニングを目指す教科に求める学習効果”、教育システム情報学会第36回全国大会講演論文集、pp.398-399
 - 43) 川田博美、稲吉由味子、千葉みどり (2011)：“地域貢献ボランティア活動とリンクした「社会人基礎力」を育成する教育プログラム導入の試み”、教育システム情報学会第36回全国大会講演論文集、pp.396-397
 - 44) 斎藤寧 (2009)：“「社会人基礎力」の詳細定義—大学での具体的展開への若干の提言—”、比治山大学短期大学部紀要第44号、pp.22。
 - 45) 経済産業省 (2010)：『社会人基礎力育成の手引き』、2010年12月31日、朝日新聞出版。
 - 46) 大久保幸夫 (2004)：『仕事のための12の基礎力』、2004年5月24日、日経BP社。